

氏 名 いぬい ゆきこ 乾 由 紀 子
 学位(専攻分野) 博 士 (人間・環境学)
 学 位 記 番 号 人 博 第 335 号
 学位授与の日付 平 成 18 年 3 月 23 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
 研究科・専攻 人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 文 化 ・ 地 域 環 境 学 専 攻
 学位論文題目 炭鉱写真絵葉書の効用
 ——イングランドおよびウェールズの石炭産業を主題とする初期写真絵葉書——

(主 査)
 論文調査委員 教 授 川 島 昭 夫 教 授 島 田 真 杉 教 授 高 橋 由 典

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の構成は、序章、第1章「写真の初期大量複製とイギリス労働者階級—石炭産業を中心として」、第2章「炭鉱の配達—ダービシャーの石炭会社の広告写真絵葉書」、第3章「コミュニティのアイコン—ウィガンの女性炭鉱労働者を主題とする初期写真絵葉書」、第4章「記念された死—バーミンガム近郊の炭鉱絵葉書を主題とする初期写真絵葉書」、第5章「炭鉱のスーヴェニア—南ウェールズの炭鉱の初期風景写真絵葉書」、および結論からなる。各章いずれも、19世紀末から20世紀初期におけるイギリスの石炭産業の現場、とりわけ採掘労働に従事した炭鉱労働者を写した写真絵葉書が、当事者である人々によって、どのように受容されたかを論じているが、各章副題に見られるように、それぞれの章の対象とする地域と分析視角は異なり、それぞれがモノグラフとしても成立している。同じ写真絵葉書というメディアが、発明から普及・定着までの時期を追って、また各産炭地の地域的特性によって、さらに写真という形で定着される経験の種類にしたがって、重層的で複合的な意味あるいは効用が獲得されたことを、全体として浮かび上がらせる意図に基づいたものである。

序章において、写真絵葉書がイギリスにおいては、1890年代に始まり、裏面への通信文の記入が許された1902年以降爆発的なブームを迎えたことが指摘される。その後、第1次大戦期までの10年あまりが、印刷技術の向上と、写し撮られる主題の著しい拡大もあって、絵葉書の黄金時代と呼ばれる。写真が、通貨のごとく、個人によって所有され、蓄積され、また交換される事例は、絵葉書以前にも、ステレオグラフ（立体視写真）、カルト・ド・ヴィジット（写真付き名刺）、ランタン・スライド、などにおいて見られたが、第1章において筆者は、それらの先行するメディアにおいても、産業と労働・労働者が撮影された例が少数であっても存在すること、しかしその視線は他者を観察し分類することで世界を統御する地歩を得ようとする、19世紀の中産階級特有の傾向を帯びていたことを論じる。写真絵葉書は、はじめその系譜上にあって、その視線を共有しながら、やがて「写される」人と「見る・使用する」人が同一であるような、新しい体験として労働者階級により獲得されることになる。

ダービシャーの石炭会社クレイ・クロス社が、宣伝・販売促進用に制作した1910年代の広告写真絵葉書のシリーズを分析対象とした第2章では、上記19世紀の先行メディアにおける視線との連続が確認される。このシリーズにおいては、引火の危険が伴い技術的に困難であった坑内労働の撮影が実行され、働く労働者がクローズ・アップされたが、そこで「典型的」労働者として撮影された個人が、労働者コミュニティにおいて「典型的」であったというより、会社に協調的で体制に順応的である望ましい労働者の「タイプ」であったことを、筆者は関係者からの聞き取りによって明らかにしている。

一方、第3章では、ランカシャーの炭坑町、ウィガンの女性炭鉱労働者を写した複数の絵葉書を通じて、階級とジェンダーの問題が論じられる。ウィガンは坑口部において女性が多く運搬などの業務に従事したことで知られており、ヴィクトリア朝の服飾規範に反して女性がズボンを着用していたことは、性的な含意もともなっており、すでにカルト・ド・ヴィジットにおいてもその姿で作成されたものが注視のまとなっていた。しかし、絵葉書における女性労働者はより積極的にレンズの前にたち、陽気にふるまい、自らを共同体的な価値の象徴として記号化した形跡があると指摘する。

第4章では、バーミンガム近郊ハムステッド炭坑で、1908年に発生した落盤事故、およびその救援にあたったレスキュー隊員の中からも犠牲者が生まれた悲劇を、いかに写真絵葉書が報じたかを扱っている。絵葉書は新聞と同じく、できごとを報道するメディアとして機能していたわけであるが、新聞と絵葉書で写真がどのように利用されるかを比較対照することで、絵葉書の写真がモンタージュ技法などによってモニュメンタルな「もの」として構成されていることを強調する。「もの」である写真は、個人的な回路を通じて、交換され、所持され、保管されることで、死を記憶し、追悼するためのメディアとして、新聞写真よりはるかに広範な効用をもつことになる。

第5章では、ウェールズ南部の産炭地を、周辺の山岳・溪谷などの風景と共に撮影した絵葉書を対象とする。20世紀の初頭は、石炭の産出量においても従事する労働者の数においても石炭産業の全盛期にあたり、ウェールズのような僻遠の過疎地においても、出炭量の増大にともなう、多くの人口の流入が見られた。自然の中に産業施設が屹立するような特異な風景は好んで写真絵葉書の主題とされたが、それらの絵葉書は、故郷から産炭地へ、産炭地から他の産炭地へと移動を経験した炭鉱労働者が、近親者や縁故者に消息を伝達する手段として多用された。風景の中にいるはずの自らを載せて、葉書は投函されるのである。そこでは、通信の文面と写真とを重ね合わせることで、彼ら自身の体験が再現されている。

ここにいたって、写真及び写真絵葉書は、19世紀的な他者による観察の視座から脱して、労働者が自らの記憶を保存し、価値を体現し、心象を映し出し、そしてそれらを同じ境遇の人々の間で交換するためのメディアとして「効用」を獲得することになったと結論する。

論文審査の結果の要旨

学位申請者の論文『炭鉱写真絵葉書の効用—イングランドおよびウェールズの石炭産業を主題とする初期写真絵葉書』は、20世紀の初期における英国の写真絵葉書、とりわけ石炭採掘の現場およびその炭坑労働者のコミュニティを主題とした絵葉書が、その労働に従事する人びとにどのように受容され、収集や通信利用というかたちでいかなる経験を彼らに与えたかを、資料それ自体の発掘・収集、研究者や遺族への取材を通じて明らかにしようとする論文である。

当該の時期は、英国において石炭産業が空前の繁栄を迎え、生産量においてもまた労働者の数においてもピークに達した時期である。同時にそれは、19世紀の末に誕生した絵葉書という通信手段が、それ自体ひとつの視覚情報を有するメディアとして確立するにとどまらず、印刷技術の発達やデザインの洗練、さらには写真によって切り取られ記号化される世界の断片の際限ない増殖もあって、「もの」としてのカードが交換・収集される対象となり爆発的なブームを見た、いわゆる「絵葉書の黄金時代」にもあたる。さらにまた先行する19世紀最後の20年間には、英国における労働者の文化、労働者の固有の生活様式の成立をみた。絵葉書の収集・使用は、それ自体がフットボールや海水浴とならび、労働者の日常と非日常を構成する重要な要素となり、かつまた同時代的にも、またはるか時を隔てたわれわれに対しても、この労働者の生活世界というものが何であったかを伝達するメディアとなった。このような幸運な符合に着目し、著者は、写真という19世紀の発明を、労働者がいかに自分たちのためのものとして獲得し活用していったかという、その「効用」を論じて十分な成功をおさめたといえよう。

本論文について特筆すべき点は以下の3点に整理することができる。

まず第一に、著者が紙の上に定着された図像（イメージ）のみを分析の対象とするのではなく、写真、とりわけ絵葉書が「三次元」の「物」、あるいは「触感性」のある「物」であることを重視していることがあげられる。その制作（印刷・出版）から流通（価格・頒布形式）、消費（通信・収集・保存）にいたるすべての局面に関して考察が試みられ、またそのいずれにおいても入念な調査や取材が徹底されている。過去の世界を再構成するにあたって、書かれた記録、文字資料を著しく偏重するきらいのあった歴史学が、写真などの図像資料を、挿画的な利用を脱して、それ自体のうちに読み解かれねばならない内容をはらむ歴史資料として扱うようになったのは、ようやく近年になってのことである。しかも絵葉書のように、私的でその場かぎりのものとみなされるエフィメラ資料はほとんど顧みられることがなかった。先行のわずかな研究は、世界を分類し、収集し、管理するブルジョワ的な視線のもとに、19世紀の写真のもつ（とりわけ異文化・異民族に対する）他者性認定の機能という写真史的なコンテクストに専ら重きを置いてきた。著者は、それらの視座にも注意を払いつつも、上述のように絵葉書の持つ「物」としての側面を重視することで、さらには通信の文面と絵葉書の図像を重ねて読み解くこと

によって、広告、象徴、追悼、記念などさまざまな「効用」を浮かびあがらせ、写真史的な制約からより豊かな意味世界を解放することを可能にした。

第二に特筆すべきは、絵葉書以前に存在し、かつ絵葉書と同様に収集の対象となった、ステレオスコープ写真、カルト・ド・ヴィジット、ランタン・スライドなどの写真利用の「メディア」にして「物」が、産業や労働者をどのように写し、また労働者がこれらのメディアにいかに関与したかを比較対照することで、19世紀から20世紀にかけての労働者の経験の連続と断絶とを明らかにしていることである。このような通時的な視点は、絵葉書そのものについて論じるさいにも採用されており、企業広告目的のための絵葉書、女性炭鉱労働者のみを主題とした絵葉書、事故報道のための絵葉書、風景の中の炭鉱を描いた絵葉書など、論文を構成する各主題は、ただ絵葉書の用途やタイプの多さを示すのではなく、労働者の絵葉書の需要が、段階的かつ複線的であったことに対応している。一面、ひとつの結論に直線的に向かう明快さに欠けるさらいはあるが、歴史的事象の多面的で多義的な特徴をよくとらえており、ここからさらに豊かな歴史研究の展開を予想させるものとなっている。新たな研究分野を切り開くものといえよう。

第三に、資料の搜索の徹底をあげることができる。現地に長期間滞在して、散逸しがちなエフィメラ資料を、自身も多く市場において発見し、また可能な限りの公的機関および個人収集家に接触して、閲覧・記録につとめたことが、論文の本文・注記によく反映されている。個人の収集家・研究者は、何らかのかたちでかつての石炭産業・炭坑コミュニティに関わりのある存在であることが多く、それらの人々との接触によって、文献にない情報を通信や口頭で得ることもあって、文献史学の限界をこえた調査・取材を实践した。この未利用・未開拓の資料の徹底した搜索は、著者の論述に迫真の効果をもたらしている。

なお本論文の第1～4章は、『日本写真芸術学協会誌』、*ICONICS: International Studies of the Modern Images*、および『映像学』の各学術誌に審査を受けて掲載された。

以上のように、調査委員は本論文を、意欲的で学際的なところみとして高く評価し、人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻ヨーロッパ文化環境論講座にふさわしい内容を備えたものと判断した。

よって本論文を、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年1月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。